

日本語配慮表現データベース構築プロジェクト報告(1)

——研究計画と2018年度の活動報告——

山岡政紀（創価大学）

要 旨

2018年度より採択を受けた科研費基盤研究（B）研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」の研究期間初年度に当たる2018年度に行った諸活動について報告する。本研究課題の概要、目的と方法、社会的貢献、独自性と創造性、目標・方法論と研究活動、研究代表者・分担者の役割等について、採択を受けた研究計画調書に基づいて整理、報告する（1.～3.）。初年度に当たる2018年度の具体的活動としては、2018年8月に行った研究合宿の内容（4.2）、データベースの構造について行った議論検討（4.4）、本研究課題の構想に理論基盤を与える新刊書『日本語配慮表現の原理と諸相』（くろしお出版、2019年秋刊行予定）の内容、その進捗状況（4.5）などについて報告する。

キーワード：配慮表現、データベース、ポライトネス、慣習化、文脈依存

1. はじめに

2018年度4月、科学研究費補助金基盤研究（B）研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」の採択を受けた。これまで基盤研究（C）の採択は複数回受けているが、基盤研究（B）での採択は初めてである。この研究課題によって得ようとしている成果の規模も大きい分、研究経費の規模もこれまでのものより大きい。そしてそれはそのまま社会的責任の大きさを意味するものである。ゆえに、採択は喜ばしいことであったと同時に、研究計画の遂行に向けて身の引き締まるものでもあった。4年間というタイムスパンの長期計画ではあるが、着実に計画を遂行しつつあることを確認するため、毎年プロジェクト報告を記して広く公開し、研究者諸氏の批正を仰ぎながら進めていくこととする。

研究代表者（本稿の筆者。以下、この呼称で記載する）は、科研費研究課題の合同研究会として、牧原功氏、小野正樹氏と共に「日本語コミュニケーション研究会」を2011年2月に発足し、各氏の科研費報告書を兼ねた「日本語コミュニケーション研究論集」を毎年刊行してきた。本稿はこの研究論集の第8号に収録するものである。

2. 本研究課題の概要

本研究課題の概要は以下の通りである。

研究課題：日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築

研究期間：2018年～2021年（4年間）

研究種目：基盤研究（B）

研究課題/領域番号：18H00680

研究経費配分額：9,750 千円 (直接経費：7,500 千円、間接経費：2,250 千円)

研究経費 2018 年度: 2,860 千円 (直接経費：2,200 千円、間接経費：660 千円)

キーワード：配慮表現 / 敬意表現 / ポライトネス / 慣習化

研究代表者：山岡政紀 (創価大学)

研究分担者：牧原功 (群馬大学)、小野正樹 (筑波大学)、三宅和子 (東洋大学)、甲田直美 (東北大学)、西田光一 (山口県立大学)、大塚望 (創価大学)、斉藤信浩 (九州大学)、大和啓子 (群馬大学)、伊藤秀明 (筑波大学)、斉藤幸一 (広島修道大学)、宮原千咲 (創価大学)、市川真未 (創価大学)、以上 12 名

研究協力者：野田尚史 (国立国語研究所)、徳井厚子 (信州大学)、塩田雄大 (NHK 放送文化研究所)、池上達昭 (くろしお出版)、李奇楠 (中国・北京大学)、金玉任 (韓国・誠信女子大学)、カノックワン・ラオハブラナキット片桐 (タイ・チュラロンコン大学)、リナ・アリ (カイロ大学)、以上 8 名

3. 本研究課題の目的と方法

3.1. 本研究の目的

現代日本語には配慮表現、すなわち他者との対人関係をなるべく良好に維持することに配慮して用いられる慣習的な表現が数多く存在することが、近年知られるところとなり、研究テーマとしての注目が高まってきている。しかしながら、その表現の多様性や文脈依存的な性格のために、日本語母語話者の日常会話に満ちあふれているにもかかわらず、理論的な記述、整理が追いついていない。その結果、日本語教育への導入が遅れ、現在も日本語教師や日本語学習者向けの文法書には記載が乏しく、日本語学習者は日本語母語話者の会話によって経験的に習得する以外にない状況にある。そこで、研究代表者がこれまで取り組んできた配慮表現の用例収集、分析・考察を発展させながら、問題意識を共有する研究者とチームを作り、コーパスから取得した正用の用例のみならず、日本語学習者の誤用・非用例も収集し、日本語教育における配慮表現の導入促進に供したいと考える。また、これをもとに将来構想である『日本語配慮表現辞典』(仮称、以下同じ) 編纂のための基盤形成とする。

3.2. 本研究の背景と経緯、問題提起

もともと日本語には対人的配慮に基づく表現が数多くあった。贈り物を贈る際に、それが高価な贈り物であっても「つまらないものですが」との言葉を添えたり、相手の実際の多忙さに関わりなく儀礼的に「ご多忙のところ」と前置きしたりなど、副詞句に多く見られるこれらの表現には、その句を構成する実質語の本義が捨象され、対人的儀礼として慣習化しているものが少なくなかった。それらは、固着的な連語表現という点で、隠喩が慣習化した慣用句 (例. 火中の栗を拾う、助け船を出す、等) と似た特徴を有するが、慣用句は範疇化されて辞典まで作られているのに対し、配慮表現は範疇化も表現群の収集も十分になされてこなかった。日本語話者にとっての自然さゆえに看過されてきたと考えられる。

そして、21 世紀に入って以降、井出祥子による「敬意表現」の考察や、彭飛、山岡政紀（研究代表者）、野田尚史（研究協力者）らによる「配慮表現」の範疇化・考察が徐々に進められ、現在はこれらの配慮表現研究が日本語学・日本語教育・語用論の主要な研究テーマとなるであろうことを予見させる萌芽的状况にある。

研究代表者のこれまでの研究では、前述の副詞句のように形式的に慣習化した連語表現だけでなく、形式的には何ら慣習化していない単語レベルでも、その意味が当該語彙の原義を離れて配慮機能に慣習化している事例を多く指摘している。副詞 4 語の事例を簡略に示す。

配慮表現	原義	配慮機能	配慮表現の用例(原義喪失)
ちょっと	程度がわずかなさま	相手との摩擦を緩和	協力はちょっとできかねます
ぜんぜん	全面的な否定	相手の心的負担を緩和	私、ぜんぜん行けますよ
たしかに	まちがいないさま	相手への賛同を表す	たしかにあの人田中さんかも
いちおう	不十分であるさま	自賛の程度を抑制	いちおう東大を出ています

いずれもある一定の文脈（ここでは省略）のもとで、各語が原義を喪失して対人的な配慮機能のみに特化された表現となっている。しかもこれらは同様の文脈が頻出するため、文脈ごと慣習化して定着している。このような特徴を備えた配慮表現は副詞だけでなく、形容詞（すごい、大変だ等）、接尾語・補助動詞（とか、たり、～てくれる等）、文末表現（～かもしれない、～させていただく等）などにも数多く見られる。以上述べてきた配慮表現をめぐって、本研究課題の核心をなす学術上の問題提起は以下の 3 点に集約される。

1. 配慮表現に該当するのはどの語彙・表現なのか？（なるべく多く挙げたい）
2. 配慮表現の使用文脈と配慮機能との相関関係を体系的に記述することができるか？
3. そのことを日本語教育の教材開発やコースデザインに活かすことはできるか？

3.3. 本研究の社会的貢献、独自性と創造性

本研究が目的とする学術的・社会的貢献、学術的独自性と創造性は 4 項目に集約される。

1. 理論的言語研究においては、現状において既に配慮表現が、現代日本語研究の特に語用論の分野で研究者の関心を強く惹きつけており、主要な研究テーマの一つとなりつつある。その状況下にあつて、これまでは個々の配慮表現に対して、個別の説明がなされてきた。本研究課題により、配慮表現研究に明確な全体像と今後の研究のための体系的な指標を与えることができる。
2. 日本語教育においては配慮表現が学習項目として適切に導入されていない現状があるが、本研究課題の成果により、日本語教育関係者が中上級日本語教育の教材開発、教授法研究において適切に配慮表現を導入していくための判断材料が提供されることとなり、日本語教材への配慮表現の導入、日本語学習者の理解・習得が促進される。
3. 配慮表現が既に実態として現代日本語に満ちあふれていることを考慮したとき、初等・中等教育における国語教育の指導項目としても看過することはできない。敬語表現は既に初等教育（小学校）の段階から導入されているが、配慮表現はより高度な対人的配慮が必要であるため、中等教育（中学・高校）での導入が望ましい。本研究課題により、

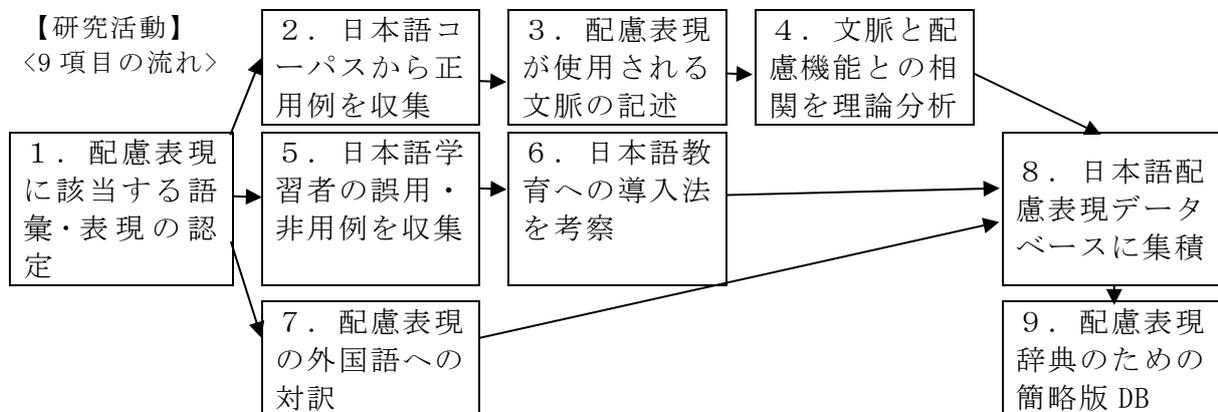
文部科学省や国語審議会の議論・検討に一石を投じるものとなる。

4. 本研究課題の成果は一般国民が日本語の配慮表現の有効性を自覚することにもつながり、より円滑な日常の対人関係構築に役立つことが周知される契機となる。また、本研究の成果をもとにした一般向け啓蒙書が編まれ、生涯教育にも供することが期待できる。

3.4. 本研究の目標・方法論と研究活動

本研究が目標とする研究成果および方法論は以下の9項目の研究活動に集約される。

1. 日本語における配慮表現に該当する語彙・表現を出来る限り多く認定する。
2. 各配慮表現の正用例を日本語コーパス(現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、日本語自然会話書き起こしコーパス、シナリオ会話コーパス等)から収集する。
3. 各配慮表現が使用される文脈を記述する。具体的には、発話の発話機能(例:《依頼》、《主張》、《反論》)や、発話を取り巻く語用論的な状況(発話者の対人関係、発話内容等がもたらす発話参与者への心理的負担など)を用例から丹念に記述する。
4. 各配慮表現の使用文脈と配慮機能(=対人関係にもたらす効果)との相関を、LeechとBrown & Levinsonのポライトネス理論をもとに分析し、考察する。
5. 各配慮表現の誤用・非用(使用すべき文脈で使用しない)と認定される用例を日本語学習者コーパス(KYコーパス、日本語学習者データベース、学習者作文コーパスなたね、寺村誤用例集データベース等)から収集し、該当箇所にラベリングを行う。
6. 学習者の誤用例・非用例をもとに日本語学習者における配慮表現習得の困難点を予測し、日本語教育へのより適切な導入法、コースデザインのあり方を整理する。
7. 各配慮表現に対し、英語、中国語、韓国語、タイ語、アラビア語との対訳を作成する。
8. 以上の研究成果を日本語配慮表現データベースに集積する。最終目標としては約1000語規模の収録を目指す。
9. 前項のデータベースの中から各配慮表現の意味・機能の説明と用例をコンパクトに整理・抽出し、日本語学習者の学習、日本語教育・国語教育に従事する教育者、指導者の研鑽に供する『日本語配慮表現辞典』の基盤となる簡略版データベースを作成する。



3.5. 研究代表者、研究分担者の役割

本研究は、研究代表者を中心に国内の研究分担者 12 名、国内の研究協力者 4 名、海外

の研究協力者4名の21名が協力して行う。役割分担の概略は以下の通りである。

【研究代表者】**研究代表者**：山岡政紀は、日本語配慮表現データベース構築、並びに配慮表現辞典の作成計画全体の方針について立案を担当するとともに、本研究課題におけるすべての作業の統括・遂行の責任を担う。配慮表現の理論的分析の統括や、データ収集、入力の方針の統括を行うと共に、自身も研究分担者と共に具体的作業を実行する。**研究活動**：1 配慮表現語彙・表現の認定を行い、共同研究者に作業の指示を行う。また、本研究課題主催の「日本語コミュニケーション研究会」やその他の国際シンポジウムを通じて、研究成果を公開し、研究者諸氏の批正を採り入れて内容を強化し、配慮表現辞典の編纂へと還元する。

【Aチーム】**研究分担者**：牧原、小野、三宅、甲田、大塚、大和、**研究活動**：2 各表現の用例収集、3 文脈の記述、4 文脈と配慮機能の相関に関する理論的分析。

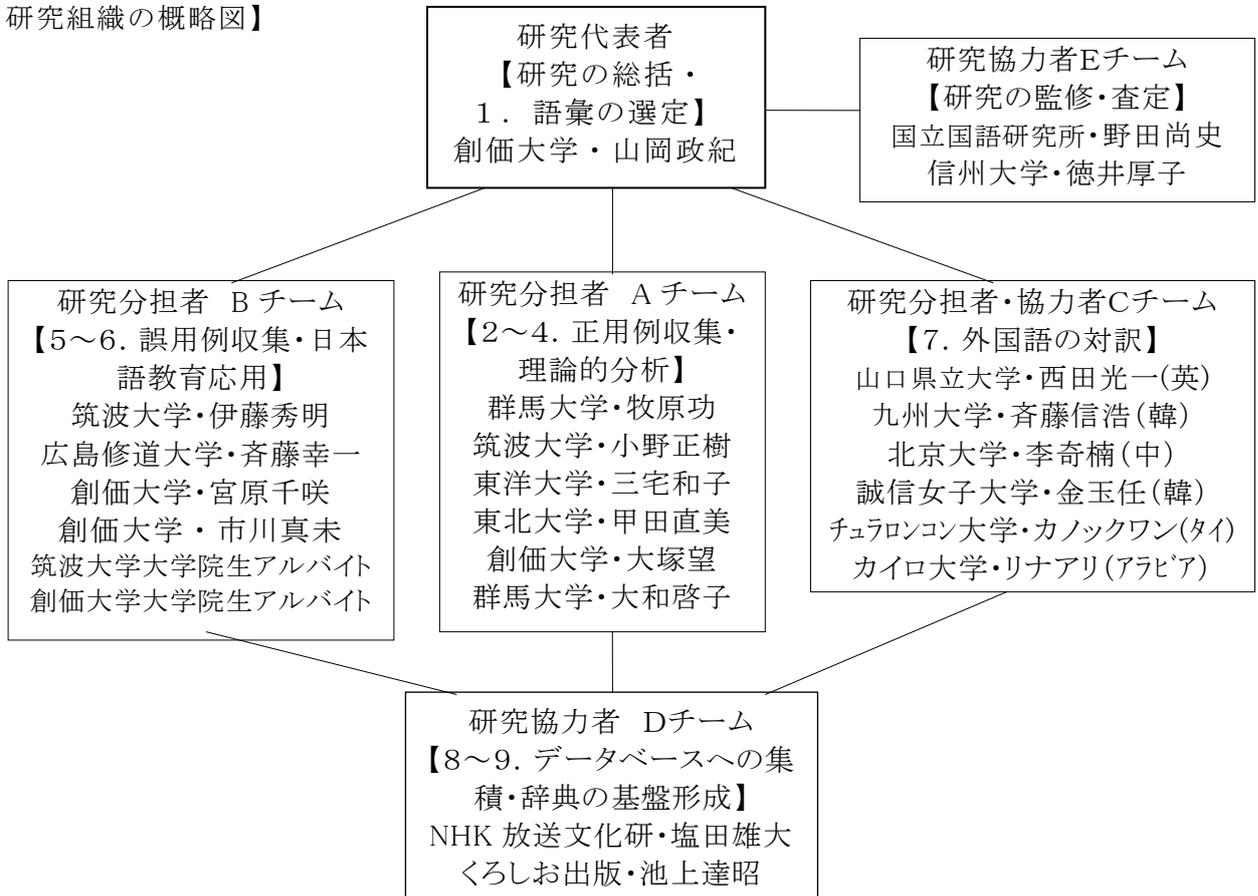
【Bチーム】**研究分担者**：伊藤、斉藤(幸)、宮原、市川、**研究活動**：5 誤用・非用例の収集、6 日本語教育への応用。大学院生アルバイトへの委託、連携、点検も行う。

【Cチーム】**研究分担者**：西田(英語)、斉藤(信)(韓国語)、**研究協力者**：李奇楠(中国語)、金玉任(韓国語)、カノックワン(タイ語)、リナ・アリ(アラビア語)、**研究活動**：7 外国語との対訳。

【Dチーム】**研究協力者**：塩田、池上、**研究活動**：8 日本語配慮表現データベースへの入力、9 『日本語配慮表現辞典』の基盤形成。

【Eチーム】**研究協力者**：野田、徳井、**研究活動**：研究全体の方向性を監修、査定し、評価コメントを寄せる。

【研究組織の概略図】



【研究組織の連携】

研究分担者のうち、牧原功、小野正樹は、研究代表者・山岡政紀とともに『コミュニケーションと配慮表現』（2010年、くろしお出版）を執筆した共著者であり、従前の科研費研究課題でも研究分担者として協力しており、関係は十分取れている。

また、三宅和子、甲田直美、西田光一、大塚望、大和啓子は筑波大学大学院の同窓であり、斉藤信浩、斉藤幸一、宮原千咲、市川真未は創価大学出身者で、学部・大学院時代に研究代表者の指導学生であった者である。また、研究協力者の野田尚史、徳井厚子、塩田雄大、池上達昭、および海外研究協力者4名とも関心を共有する知己であり、連携は十分である。

日常的にはインターネットを通じての連携が主となるが、やはり研究代表者・研究分担者・研究協力者が一堂に会して議論検討は不可欠である。そのため、本研究課題の期間中、本研究課題主催の「日本語コミュニケーション研究会」研究合宿、および公開研究会を各1回開催し、集って議論・検討する。その成果報告書として研究論集を発刊する。また、国際シンポジウムへの参加等を通じて、研究者諸氏への問題提起、中間報告、意見交換を行うものとする。

3.6. 本研究の着想に至った経緯

研究代表者は2004年に論文「日本語の配慮表現研究の現状」（『日本語日本文学』14号）を発表して以来、配慮表現の個々の語彙の収集、分析、考察に努めてきた。研究を重ねれば重ねるほど日本語がいかにか配慮表現に満ちあふれているかを痛感するばかりである。これほどまでに日本語のなかで大きな要素を占めているにもかかわらず、学界において見過ごされてきたことは不思議でさえあったが、彭飛(2004)、井出祥子(2006)、国立国語研究所(2006)、山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)などの刊行によって、ここに研究すべき無尽蔵のテーマが眠っていることが次第に認識されつつある。

それに伴って日本語教育における対応の遅れもはっきりしてきた。研究代表者の勤務先には中国人の留学生が多いが、3.2で挙げた副詞「ちょっと」「ぜんぜん」「たしかに」「いちおう」の配慮表現としての用法について調査してみると、留学前に中国で習った授業、教科書、文法書のどれにもなかったため、来日後に日本人との会話の中で自然に習得していったものだという。彼らのように日本語学習者の中には中上級の文法・語彙を習得しているにもかかわらず、対人コミュニケーションという観点では不自然あるいは不適切な表現を使用する者は一般的にも少なくない。その内容を検証すると、それが配慮表現の誤用や非用が原因であるケースが多く見られる。

このような状況を改善するには、そもそも配慮表現とはどのようなもので、日本語教育にどのように採り入れていくべきものであるのかを明確にするための理論的分析と、具体的に配慮表現と指摘される表現群、語彙群をなるべく多く列挙して対象を明確にする作業と、両面が必要との認識に至った。その双方を同時に進めていく方途として、配慮表現が適切に使用されている文脈付きの用例、逆に配慮表現の誤用や非用が見られる学習者の用例をなるべく多く収集し、データベース化したいと考えた。本研究課題の終了後、さらに出版社、編集者の協力を得て『日本語配慮表現辞典』を刊行して参りたく、その基盤形成

を図りたい。

3.7. 関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

1980年代に Leech (1983) *Principles of Pragmatics*, Brown & Levinson (B&L) (1987) *Politeness* が刊行されて以降、コミュニケーション上の対人的配慮行動を記述する「ポライトネス理論」が言語学界で注目を集めた。人は誰でも対人関係をよりよく維持しようとする欲求(=フェイス)を持っており、人は自分と相手のフェイスに配慮した言語行動を取るといえるものである。ポライトネス理論が紹介されたことにより、日本語のポライトネスも議論されることとなった。1999年の国語審議会では、「恐れ入りますが」「おかげさまで」「先日はどうも」などの慣習的な表現の中にこうしたポライトネスの配慮が見られることを指摘し、これらを「敬意表現」として範疇化して教育現場で取り上げるなどの提案がなされた(第22期第1委員会)。その後発表された研究書では、国語審議会の中心者だった井出祥子による(2)では「敬意表現」の呼称が用いられたが、それ以降の研究の進展においては「配慮表現」で定着している。(下線は本研究課題の研究代表者、研究分担者、研究協力者)

(1) 彭飛(2004)『日本語の「配慮表現」に関する研究』(和泉書院)

(2) 井出祥子(2006)『わかまへの語用論』(大修館書店)

(3) 国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』(くろしお出版)

(4) 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現』(明治書院)

(5) 三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』(ひつじ書房)

(6) 三宅和子・野田尚史他編(2012)『「配慮」はどのように示されるか』(ひつじ書房)

(7) 野田尚史・高山善行・小林隆(2014)『日本語の配慮表現の多様性』(くろしお出版)

これらの刊行によって様々な角度から配慮表現に対する関心が高まり、理論的な説明原理も構築されつつある。また、それによって日本語学界において研究テーマとしての重要性が認識されてきている。しかしながら、そもそも具体的に配慮表現に該当する語彙・表現群にはどのようなものがあるのか、その数がどのぐらいに上るのかについては、十分解明されておらず、全体的な体系記述も含めて今後の研究成果が待たれるところである。

3.8. これまでの研究活動

研究代表者は、科研費基盤研究(C)の研究課題「発話機能を中軸とする日本語配慮表現データベースの構築」(平成25~28年度、以下、前回研究課題)において、配慮表現の定義の再確認、配慮表現データベースのフィールドの確定を行ったうえで、現代日本語において配慮表現と見なし得る語彙を選定し、数種類の現代日本語コーパスから検索して収集した文脈つき用例のデータベース化を試みた。その際、配慮表現全体を機能面の特徴から6分類し、それらについてコーパスから配慮機能が認められる用例を抽出してデータベースに集積した。6分類については下記の通りである。なお、現在はこれと少し異なる7分類としている。

(1) 利益負担表現(ぜひ、さっそく、お忙しいところ、おかげさまで等) 34語

(2) ぼかし表現(~のほう、みたいな、~的には、~ぽい等) 18語

(3)緩和表現（ちょっと、どちらかと言えば、～かもしれない、～と言えなくもない）28語

(4)賞賛表現（さすが、すごい、なかなか、お見事等）9語

(5)共感表現（なるほど、たしかに、まったく、ごもっとも等）17語

(6)謙遜表現（まだまだ、そこそこ、いちおう、自慢じゃないけど等）6語

合計 112 語

前回研究課題はこのように配慮表現研究の重要性を喚起した資料として一定の成果を挙げたと評価できるものの、いくつかの配慮表現のデータ収集とそれに対する分析に限られていたことは否めない。本研究課題ではチームで取り組むことによって、データ量を飛躍的に増強すると共に、配慮表現の全体的体系を記述する理論の確立を目指したい。さらに日本語学習者コーパスから収集した誤用・非用例を加えることにより、日本語学習者や言語教育者等にも役立ててもらいたいと考えている。

本研究には、研究代表者によるこれまでの研究の蓄積も活かしていく。具体的には、山岡(2008)『発話機能論』（くろしお出版）において、発話機能（＝会話において各発話が担う対人的機能）を、直観的なラベリングではなく、発話の目的や発話を取り巻く語用論的条件によって厳密に定義する理論を提唱した。発話機能論は、配慮表現の使用を誘引する対人的な不均衡状態を記述するのに有益な理論である。B&LがFTA（フェイス脅かし行為）として挙げている《依頼》、《断り》、《非難》等は、発話行為論に倣って行為(act)の語が用いられているが、日本語教育・英語教育などの言語教育においては発話機能(speech function)として機能シラバスによる教材文の記述に用いられてきたものである。研究代表者の発話機能論はこれに発話行為論と同様の理論基盤を与えるもので、ポライトネス理論と言語教育を橋渡しするものと評価できる。

また、発話機能論研究の一環として行った、科研費補助金基盤研究（C）研究課題「機能シラバス作成のための発話機能の日中対照研究」（平成 21～24 年度）においては、映画シナリオ等の会話文を大量に文字データ化し、発話機能範疇をラベリングした「シナリオ会話コーパス」を作成している。著作権の関係でコーパスそのものは非公開としているが、本研究課題においては大いに活用したいと考えている。

4. 2018 年度の活動報告

4.1. 研究者間の連携、コンセンサスの形成

本研究課題は研究協力者まで含めると総勢 21 名から成る大規模プロジェクトのため、研究者間の連携や研究の方向性をめぐる合意形成が不可欠である。そのためにまず行った項目は下記の通りである。

(1) Dropbox によるファイルシェア

(2) メーリングリストの作成

(3) 合宿研究会の開催

これにより、(1)と(2)を通じて日常的な連携を図りつつ、やはり一堂に会しての議論も不可欠であると考え、(3)を開催した。

4.2. 研究合宿の開催

2018年8月29日～31日の2泊3日で、JR熱海駅前の東横イン熱海駅前にて「日本語コミュニケーション研究会・研究合宿」を開催した。「日本語コミュニケーション研究会」は2010年度より、研究代表者山岡政紀、研究分担者牧原功、同小野正樹の三者が、それぞれ研究代表者として採択を受けた科研費研究課題の合同研究会として発足し、以来、年1回の研究会と不定期の研究合宿を開催してきた。また、科研費の研究報告書を兼ねた「日本語コミュニケーション研究論集」を年1回刊にて刊行している。

今回の研究合宿には研究代表者1名、研究分担者11名、研究協力者4名、大学院生3名の合計19名が参加し、うち15名が研究発表を行った。発表者と発表テーマは下記の通りである。

8月30日（木）午前：第1セッション

- ① 斉藤幸一（広島修道大学） 配慮表現「全然」について
- ② 斉藤信浩（九州大学） 文法・読解・聴解の得点と会話能力との因果関係
- ③ 牧原功（群馬大学） 日本語教科書に見られるポライトネス
- ④ 李丹（創価大学大学院生） 応答発話における副詞「たしかに」の機能について

8月30日（木）午後：第2セッション

- ⑤ 山岡政紀（創価大学） 基調報告：配慮表現プロジェクトの理念と研究計画
- ⑥ 金 玉任（誠信女子大学） 配慮表現「よね」に見られる情報共有の諸相
- ⑦ 大和啓子（群馬大学） 配慮表現「ナンカ」の緩和用法をめぐって

8月30日（木）午後：第3セッション

- ⑧ 三宅和子（東洋大学） メディア上の配慮
一若者のLINEを通じた依頼会話からさぐる試み
- ⑨ 伊藤秀明（筑波大学） SNS上に見られる配慮表現
- ⑩ リナ・アリ（カイロ大学） 配慮表現の日本語・アラビア語対照研究
- ⑪ 李奇楠（北京大学） 配慮表現についての日中対照

8月31日（金）午前：第4セッション

- ⑫ 市川真未（創価大学） マウンティング言語について—「ほめ」との対比から—
- ⑬ 西田光一（山口県立大学）

英語の2人称と3人称代名詞の連携による読者への親近感の演出

- ⑭ 甲田直美（東北大学） 会話における発話末のデザイン
- ⑮ 小野正樹（筑波大学） 引用表現における配慮表現

発表者は④の発表者李丹氏が大学院生1名であるのを除き、全員が本研究課題の研究代表者、研究分担者、研究協力者である。李丹氏は2019年度に学位申請を予定しており、学位取得後に研究協力者に加えたいと考えている。

このうち、②と⑭を除く13件の研究発表が本研究課題に関連するものである。そのうち、①、③、⑥、⑦、⑧、⑩、⑪、⑬、⑮の9件は4.4の新刊書の執筆内容の構想を示し、意見交換を求めるものとなっている。活発な意見交換がなされて非常に充実した研究合宿となったが、個々の研究発表の詳細については省略する。

4.3. 基調報告：配慮表現プロジェクトの理念と研究計画

前節で報告した研究合宿の⑤基調報告「配慮表現プロジェクトの理念と研究計画」について若干報告しておきたい。他の研究発表が質疑応答を含めて持ち時間が30分であったのに対し、本基調報告のみ1時間の持ち時間で行った。その内容は以下の通りである。

1. 科研費研究計画の概要
2. 科研費研究計画の構成メンバー
3. 研究目的：概要
4. 本研究の学術的背景と経緯
5. 配慮表現の定義
6. ポライトネスが慣習化した配慮表現
7. メタファーの慣習化とのアナロジー
8. 配慮表現の辞書への登載
9. 配慮表現と日本語教育
10. 本研究の核心をなす学術的「問い」
11. 研究活動・研究組織
12. 配慮表現データベースの構造
13. 配慮表現の分類と語彙
14. 『日本語配慮表現の原理と諸相』企画
15. 『日本語配慮表現辞典』構想
16. 研究計画のスケジュール

このうちの多くは本稿の第3節までに記載した通りである。12のデータベースの構造については4.4、14の新刊書企画については4.5にて詳しく報告する。

4.4. 配慮表現データベースの構造

8月の研究合宿の基調報告において、研究代表者は以下の配慮表現データベースの構造案を報告した。

- ①配慮表現☆：配慮の表現形式・語彙
- ②形式分類☆：(副詞類、形容詞類、接尾語類、補助動詞、文末表現、等)
- ③機能分類☆：(利益表現、負担表現、緩和表現等)
- ④原義☆：文脈や対人的機能を捨象した辞書的意味。本来の意味・用法。
- ⑤配慮機能☆：当該配慮表現が対人関係上どのような効果を意図して使用されるのかを記述する。ここではLeechやB&Lのポライトネス理論を積極的に活用する。使用・不使用テストなどの文法テストのほか、必要に応じてアンケート、インタビュー調査を行う。
- ⑥会話コーパスから取得した正用例：主に対人機能が明確な話し言葉コーパスから実例を収集
- ⑦学習者コーパスから取得した誤用例：配慮表現の誤用・非用と思われる実例を収集
- ⑧学習者用表現文型☆：学習者に供する典型的作例
- ⑨文脈・発話機能☆：配慮表現が使用される当該発話、及びその文脈となる先行発話の発話機能＝発話の目的⇒配慮表現の使用目的
- ⑩考察☆：以上の各項目を総合的に統括する考察
- ⑪外国語への対訳☆：英語、中国語、韓国語への対訳
- ⑫参考文献☆：先行研究の文献名

このうち、☆印の付いた項目を将来構想の『日本語配慮表現辞典』に登載する構想を持っている。逆に登載しない項目として⑥と⑦のコーパスから収集する実例がある。これはそもそも研究資料として収集することを目的とするものであるが、日本語学習者の便宜に供するという辞典の目的から言えば、紙幅を大幅に取ってしまう点、各用例に対して相応

の説明を要してしまう点など、辞典にそぐわないと考え、そのままの形では辞書には掲載しないものとする。ただし、辞典に用例は不可欠であるので、⑥と⑦の実例を参考にして⑧に担当者が簡潔にアレンジして作成した自作の作例を表現文型として記載することとする。

本基調報告ではこの⑦の誤用例を収集する必然性と困難さについて質問があった。以下は研究代表者が提示した配慮表現「いちおう」の誤用例として KY コーパスから取得したものである。

(1) 〈んー〉それからまー、なんていうかな、人とおしゃべりなのがこういうコミュニケーションとるのが〈{笑い}〉けっこうすきでね、〈あーそうですか〉でもね、んー就職探していちおう履歴書の時、〈んー〉あの一とこね書くねあの一趣味でね一、あの一おしゃべりと書くわけにはいかないし、〈いかないですねー〉でも本当におしゃべりが好きなんですよ (KY:CAH07)

(2) T : はい、えーと、お宅はどちらですか

S : えー、いちおういまー福山の方住んでおりますけど、〈あーそうですか〉はい (KY:CAH03)

日本語母語話者が自分自身に関する肯定的な事柄に言及する際、「いちおう英検 2 級を持っている」や「いちおう元サッカー部だった」などのように、自慢と受け止められることを避けるための謙遜表現として用いることが多い。(1)と(2)は学習者がこれを過剰適用して、肯定的事柄でもないのに「いちおう」を用いてしまった例と解釈した。

しかし、質問者の問題提起は第一に、(1)は「履歴書に暫定的に記載する」、(2)は「仮の住まいとして福山に住んでいる」というような解釈も可能で、その場合、「いちおう」の原義が活着していると見れば誤用とは言えないのではないか。第二に、むしろ、日本語学習者にとって配慮表現に関する理解が不足しているために配慮表現を使用すべき文脈でそれを使わないという問題、つまり「非用」のほうが重要ではないか。以上、2 点の指摘であった。しかし、非用例の収集はキーワード検索が利かないため、狙って収集するのが困難であるため、この非用例を収集する必然性があるのかについて疑問視する声も寄せられた。これについては引き続き検討することとし、データベースの構造としては当面このままとし、⑦の誤用例については任意入力とすることとした。

最終的な辞典の執筆作業においては、くろしお出版が契約するインターネット関連業者によって作成されたデータベース入力用の Web システムを使用して各担当者が入力を進めていくこととなる。ただし、Web システムは一度構築すると、構造を変更しにくくなる（変更には費用がかかる）ため、当面は Google フォームを用いて作成した「配慮表現データベース試行版」に入力を行い、データベースの構造に関する試行錯誤を経たのちに、それに応じた Web システムを構築することとなった。

その後、入力の試行を継続したが、2019 年 3 月までには十分な経験値を積むことができず、2018 年度内の Web システム構築は見送ることとした。そのため、その予算として計上していた研究経費について 2019 年度に繰り越すこととし、学術振興会に対して繰越申請を行い、受理された。

4.5. 新刊書『日本語配慮表現の原理と諸相』の企画・執筆

新刊書『日本語配慮表現の原理と諸相』（以下、新刊書）については、本研究課題の申請以前の2017年頃からその構想についてくろしお出版と協議を重ねてきた。本研究課題が採択を受けたことにより、将来的な『日本語配慮表現辞典』の作成に向けた研究上のステップとしての位置づけが明確となった。

そこで、本研究課題の初年度の主要な研究活動として本新刊書の執筆・編集を組み込むこととした。新刊書の編者は研究代表者が務め、他の筆者全員を著者として刊行する。

スケジュールとしては2018年4月に下記の全15章の構想で、編者より他の筆者9名に執筆依頼を行った。当初は2019年度中の完全出稿、2019年9月の刊行を目標に設定した。

各章の初稿のタイトルは下記の通り。ただし、最終の刊行に当たっては若干の変更や副題の追加等があり得る。

『日本語配慮表現の原理と諸相』くろしお出版、2019年秋刊

序章	配慮表現とは何か	山岡政紀（創価大学）
第Ⅰ部	配慮表現の原理	山岡政紀（創価大学）
第1章	配慮表現研究史	
第2章	配慮表現の定義と特徴	
第3章	配慮表現の分類と語彙	
第Ⅱ部	日本語配慮表現の諸相	
第4章	配慮表現「ちょっと」の機能と慣習化	牧原功（群馬大学）
第5章	配慮表現「よね」に見られる情報共有の諸相	金玉任（誠信女子大学）
第6章	とりたて詞「なんか」の捉え直し用法に見られる配慮表現	大和啓子（群馬大学）
第7章	配慮表現「させていただく」の違和感をめぐって	塩田雄大（NHK放送文化研究所）
第8章	配慮表現としての「“全然”＋肯定形」	斉藤幸一（広島修道大学）
第9章	引用表現における配慮表現	小野正樹（筑波大学）
第10章	モバイル・メディアにおける配慮	三宅和子（東洋大学）
第Ⅲ部	配慮表現と対照研究	
第11章	代名詞の指示対象から見た対人配慮の日英対照	西田光一（山口県立大学）
第12章	慣習的配慮表現の日中対照	李奇楠（北京大学）
第13章	配慮表現の日本語・アラビア語対照	リナ・アリ（カイロ大学）
第14章	配慮表現の日本語・ウズベク語対照	岩崎透（国際交流基金）・ ウマロヴァ・ムノジャット（ウズベキスタン世界言語大学）

このうち、第8章と第14章は若手による執筆のため、万全を期すべく編者による査読を行った。いずれも2019年1月までに原稿が編者に提出され、査読の結果、修正採用とした。修正稿についても2019年3月までに提出されている。これにより、本書は序章を含めて全15章となることが確定した。

他の13章については、基本的に2018年度内の2019年3月までに編者に提出されたが、編者と筆者の間で内容確認の協議に時間を要したため、編者からくろしお出版への完全出

稿については翌 2019 年度に繰り越すこととなった。(なお、2019 年 5 月初旬までにはくろしお出版への完全出稿を終えた。次年度に係る事柄であるが付記する。)

本新刊書の序章において編者である研究代表者は重要な問題提起を行っている。それは、配慮表現とは、1) 固定した語彙、語句としてリストアップが可能なものなのか、それとも 2) 単に機能的現象に過ぎないのか、このいずれなのかということである。

配慮表現が単に「言葉のポライトネス」であるとするならば、ポライトネスが極めて文脈依存的な機能現象である以上、2) の立場を取ることであり、一定の言語表現に帰着させてしまうことは好ましくないことになる。

それでいて、日本語には配慮表現と呼ばれる表現のカテゴリーが存在することが直観的に知られている。一例を挙げると、依頼を行う際の前置きに「すみませんが」や「悪いけど」といった謝罪の形式を用いたり、「よろしければ」や「お時間があれば」といった条件提示的な形式を用いたりすることは、同一文脈で頻繁に見られる。同じことは古典語の時代から「憚りながら」、「恐れながら」、「無心ながら」、「大儀ながら」、「率爾ながら」などの表現が繰り返し用いられていたことが報告されている(米田(2014)など)。これは一定の表現がポライトネス機能を帯びることが共通の文脈で繰り返し見られることによって慣習化したものと考えられる。このことについて本新刊書の序章から第三章までを使って主張している。これによって、配慮表現と呼ぶに値する語彙や語句をリストアップする 1) の立場が可能となる。つまり、この新刊書における主張が『日本語配慮表現辞典』にとって不可欠な存立基盤を提示することになるわけである。その意味で、本研究課題の初年度において本新刊書の執筆・編纂に注力したことは有意義なことだと考える。

本新刊書の刊行により、配慮表現に関する学界の問題意識を喚起し、日本語教育関係者にもその重要性について呼びかけを行ってまいりたい。そして、その下地のうえに 2023 年頃に『日本語配慮表現辞典』を完成させることを目標として、本研究課題を進めてまいりたい。

4.6. 『日本語コミュニケーション研究論集』第 8 号の刊行

研究代表者が牧原功氏、小野正樹氏と共に科研費研究課題の合同研究会として開催してきた「日本語コミュニケーション研究会」が毎年発行している「日本語コミュニケーション研究論集」は三者の科研費報告書を兼ねるとともに、関係する研究者の論考を収録し、研究の進展、議論の活性化を図るものである。本稿はこの研究論集の第 7 号に収録する予定のものである。

現在、9 名の投稿希望者(研究代表者、研究分担者 2 名、研究協力者 2 名、大学院生 4 名)がおり、各人からの提出を受け、大学院生の編集アルバイトが編集に着手しているところである。

謝辞

本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)研究課題「日本語配慮表現辞典の基盤形成のための配慮表現正用・誤用データベースの構築」(課題番号 18H00680、2018-21 年度、研究代表者 山岡政紀)の助成を受けた研究成果の報告であることを申し述べ、謝意を表します。

参考文献

- 井出祥子 (2001) 『新世紀社会と敬意表現』 勉誠出版
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 大修館書店
- 宇佐美まゆみ (2002) 「(連載) ポライトネス理論の展開①～⑫」 『言語』 Vol.31 No.1-5, 7-13, 大修館書店
- 国立国語研究所(2006) 『言語行動における「配慮」の諸相』 くろしお出版
- 野田尚史・高山善行・小林隆編 (2014) 『日本語の配慮表現の多様性』 くろしお出版
- 彭飛 (2004) 『日本語の配慮表現に関する研究』 和泉書院
- 三宅和子(2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房
- 三宅和子・野田尚史他編(2012) 『「配慮」はどのように示されるか』 ひつじ書房
- 山岡政紀 (2004) 「日本語における配慮表現研究の現状」 『日本語日本文学』 第 14 号、創価大学日本語日本文学会、17-39.
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』 くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』 明治書院
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『新版・日本語語用論入門』 明治書院
- 米田達郎 (2014) 「室町・江戸時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」 野田・高山・小林編 (2014) 『日本語の配慮表現の多様性 歴史的変化と地理的・社会的変異』 くろしお出版所収、131-148.
- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
- Leech,G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.
- Levinson,S.C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press
- Usami, M. (2003) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*, Hituzi Syobo

(山岡政紀、創価大学文学部教授、myamaoka@soka.ac.jp)